高度不安定性を有する新鮮足関節外側靭帯損傷に関する保存療法後の再受傷

西岡第一病院 スポーツ整形外科
○中野 和彦, 山村 俊昭, 谷 雅彦, 小畠 昌規, 井上 篤志, 瀧内 敏朗

はじめに

新鮮足関節外側靭帯損傷の治療は保存療法が一般的であるが, 不安定性の大きい症例の治療経過の詳細な報告は少ない. 機能的装具療法を施行し, 1 年以上経過観察した症例の再受傷の実体を調査したので報告する.

対象と方法

距骨傾斜角(TT)15度以上の新鮮足関節外側靭帯損傷15例のうち1年以上の経過観察を行った11例を対象とした. Cast固定を2～3週間行った後, 装具を装着した. 痛みのない範囲で徐々にスポーツ活動に復帰した.

結果

平均17歳, 男7例, 女4例, 平均経過観察期間は2.2年であった. 受診時のTTは平均20.0±4.9度(15 - 32), 患健差平均15.1度, 距骨前方移動距離(ADD)は平均9.1±1.9mm(6 - 12)であった. 治療後3ヵ月のTTは平均5.8±2.1度(患健差0.7度), ADDは平均6.7±1.7mm(患健差0.5mm)と改善し, 経過順調であった.

その後11例中6例に再受傷(捻挫)が生じた. 再受傷の時期は平均9ヵ月後(6 - 12)であった. 4例ではストレス検査で不安的性がなかったが, 残りの2例では高度の不安定性(TT21, 22度)を認めた. さらに, うち1例では初回受傷後2年3ヵ月に再再受傷を起こしたが, 初回同様の保存療法を行った. 治療により全例で不安定性は改善し, スポーツ活動に復帰できた.

考察

今後も高度不安定性のある症例に対して保存療法を続けて行うが, 捻挫しやすい素因についての検討や, 再受傷を防ぐためのリハビリ治療や定期検診などの対策を講じていきたい。